
月刻の叫

k.シリング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月刻の叫

【Nコード】

N1211F

【作者名】

k・シリング

【あらすじ】

那波華はある夜から立て続けに奇妙な夢を見るようになる。次第にその夢は鮮明になり内容も意味深になってゆく。同じ頃、ある猟奇殺人事件を起こした死刑囚の獄中死を皮切りに、携わった人間が次々に怪死する事件が起きる。ネットの掲示板では夢に現れ、狂笑する女”キョー子”の都市伝説と怪死事件の関係が頻繁に噂されていた。また、猟奇殺人の目撃者となった刑事は犯人の死後、奇妙な幻覚症状に悩まされる。華の夢に現れる彼女は果たして”キョー子”なのだろうか。”キョー子の呪い”に罹ったものの運命は？次第

に精神を蝕んでゆく悪夢とともに人々の想いは交差し、やがてそれ
ぞれの運命を歩み始める。その先に待つ結末とは・・・

捕らふ夢 (序章) (前書き)

民俗ホラーが好きでこの話を書き始めました。一応ジャンルはホラーにしていますが、ぶつちやけ話が進むにつれてファンタジー的な要素が濃くなっていくと思います。全体的に暗い話にはなっていますが、グロイ描写や残酷な描写は極力控えて切ない系ホラーを指して生きたいと思えます。

捕らふ夢（序章）

昨日、知らない人の夢を見た。

彼女はうつむいたまま、眠っているようだった。

私は暗い部屋に一人うずくまっていた。

なんだろう・・・この感じ・・・

自分が自分でないような、

いやそれも違う。

まるで自分が何かになり代わってゆくような・・・

霞み行く意識の中で、私は遠くで微かに響く音を捕らえた。

その時だった。

私の体にわけのわからない戦慄が走った。

音はだんだんと近づき、徐々に強く響く。

それに呼応するように体中の筋肉が緊張してゆくのがあった。

喉が・・・つぶれそう・・・

音は近づき、それが足音であることが分かるようになった。

頭の中を正体不明の恐怖が埋め尽くす。

階段を下りてる・・・ここに・・・来るの・・・

心臓が凝縮し、体中が血液で破裂しそうな気がした。

「なんで・・・」

初めて聞く彼女の声になぜか私は驚いた。

そうだ・・・怯えてるのは、わたしじゃない・・・

気が付くと私は部屋の隅にたって彼女を見つめていた。

足音はもう限界を超えて迫っている。ここに来ることは避けられな

いだろう。

いつの間にか彼女は伏せ続けていた顔を上げ、目の前の鉄の扉を凝

視していた。

足音が止まった。

世界が彼女に終わりを告げる。

ドアノブが回り始め、もう止まることはないだろう。
永遠に続くと思っていた彼女の夜は、もう外の光が差し込み始めてしまった。

誰？

夜が明けて間もないのか、外はまだ薄暗い。

見れば隣で寝ている妹の雫は布団を大きく跳ね除けてピクリとも動かない。

部屋が薄暗いせいで壁に掛かっている時計の針が何時を指しているのかはよくわからなかった。

早く起きすぎたかな・・・しかも・・・またあの夢・・・
同じ夢を、しかも立て続けに見るということは普通無い。

そのような場合は現実には何か原因があるのかもしれないが華には心当たりがなかった。

・・・いや、無いこともないか・・・

華は布団を抜け出し、部屋の隅にある冷蔵庫の中からミネラルウォーターを取り出してキャップをあけた。

喉が酷く渴いていた。あんな夢を見たからか、背中が汗でぐっしょりしている。

・・・気持ち悪い・・・

華はミネラルウォーターを持ったままベランダに出た。

夏も終わりが近い。そのせいか最近雨の日ばかり続いたように思う。

部屋の中は変わらず暑かったが外は空気がひんやりしていて心地がよい。

夢・・・そうだ、あのときもわたしは同じ夢を何度か見たことがあったな・・・

「お母さん、死んじゃった時か・・・」

母、そして父がいなくなつて、二人は叔父の家に引き取られること

になった。華は大学に入り十九歳になった今、実家の富山を離れ、東京で雫とともに生活している。二歳下の雫はもともと実家のほうの高校に通っていたのだが、華の大学進学にあわせて半ば強引にこちらの高校に転校した。叔父は最後まで反対していたが、華に雫の決断を否定するつもりはなかった。雫は叔父のことを酷く嫌っていた。華たちの父と叔父は幼少期から馬が合わなかったと聞いている。父がいなくなって叔父の家に引き取られてからも叔父は頻繁に父の悪口を言った。華たちが言い返したりすることは決してなかったが、雫は小さい頃から父になついていたし、華だって叔父のことは好きになれずにいた。だから雫があの家に残ることを嫌がる気持ちは当然華には理解できた。あれからまだ二年くらいしかたっていない。しかし東京に来てから、ずいぶんと身の回りの環境が変わった。雫と二人だけの生活はやはり大変で、毎日が忙しかった。けれども二人にとってそれは悪いことではないのかも知れない。少しずつ、少しずつ二人は両親のことを忘れてゆけるかもしれないのだから。

「・・・そういえば、こっちにきてからだな。お母さんの夢、見なくなったの・・・」

「お姉ちゃん？どしたの？」

声がして振り返ると雫がまだ半分眠ったような顔をしてこちらを眺めていた。

「もう時間？」

華は部屋に戻り時計を見た。

「うっん。まだ4時。起こしてごめんね。」

ミネラルウォーターを冷蔵庫に戻し華はベッドに入った。

「雨、まだ降ってる？」

華は窓のほうを見た。空は変わらず重々しく淀んでいる。

「今は降ってないけど、起きる頃には降ってそうだね。」

「雨ばつかし。」

それからすぐに、雫は再び眠りに落ちたようだった。華は眠くならなかったのどぼんやりと窓の外を眺め、今朝の夢の内容を思い出そ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1211f/>

月刻の叫

2011年1月15日18時51分発行